

## リチャーズによる哲学的メタファー論の復活

香 春

### 0. 序論

本論は、リチャーズ (I. A. Richards, 1893–1979) の『修辞学の原理』(*The Philosophy of Rhetoric*, 1936)<sup>1)</sup>に関する考察である。本論の目的は、この著作が修辞学や言語学、そして、メタファー研究にどのような意義をもっているのかを明らかにすることにある。

リチャーズは、アリストテレスのメタファーに関する偉大な発見に魅了され、メタファーの本質を追求し、メタファー研究を復活させようとした。しかし、当時は、メタファーとは単なる言葉の修飾 (ornament) であり、修辞的技巧 (figure、ないしは trope) の一種類として理解されていた。なぜならば、メタファー研究はアリストテレスによって始まったものの、アリストテレス以降、伝統的な修辞学者たちの分類法では、単なる修辞的な文彩の一種類となっていたからである。また、近世になりヨーロッパ哲学においては、メタファーは誤解を生みやすいという理由で、その使用が避けられてきた<sup>2)</sup>。それに対して、彼は、そのような哲学的問題の解決方法は、問題を解決しているのではなく、問題を回避しようとしていると指摘した。そして、リチャーズは全ての言語表現に誤解の恐れがあることを指摘し、メタファーにまつわる問題を回避するのではなく、言語における意味の問題を徹底して究明することこそが問題解決の近道であると考えた。

最終的にリチャーズは新しい意味論の原理 (principles) を唱え、さらに、それをメタファー研究に応用することによって新たな *The Philosophy of Rhetoric* (『修辞学の原理』) を構築した。その著作は、彼以降の修辞学や言語学に新しい考えをもたらすこととなった。

メタファー研究におけるリチャーズの位置づけに関して、エヴァ・フェーダー・キテイ (Eva Feder Kittay) の解説を見てみよう<sup>3)</sup>。彼女によれば、〈メタファーは単なる修辞学上の修飾である〉という見解を否定する流れが、現代の分析哲学に登場したのが、哲学者ブラックのメタファー論を通じてであるという。そして、ブラックの相互作用説とは、〈メタファーには、還元不可能な意味があり、明確な認知的内容がある〉と主張するものである。このようなブラックの説は、キテイによれば、リチャーズに多くを負うものであるという。そして、そのリチャーズは、哲学者コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) に師事した学者であり、結局、メタファーの認知的重要性に関する議論は、カント主義やその影響を受けたコールリッジの哲学にまで遡る系譜を有するという。

さらにそのような哲学的系譜に繋がるリチャーズがメタファー論においてどのような位置づけになるかに関しては、レイモンド・W・ギブズ Jr. の次のような評価が参考になる<sup>4)</sup>。ギブズによれば、1994年の段階で「アリストテレスの見解は、特にこの5、60年の間、メタファーの理論家たちの間に多くの議論を引き起こしてきた」という。そして「1930年代にはI. A. リチャーズによって、メタファー研究は再び注目を集めるようになった」とし、特に彼が「主意」(tenor)と「媒介」(vehicle)といったメタファーを構成する要素に独自の名称を与えたからであると指摘している。

## 1. 修辞学の定義と文脈の原理の探究

まずリチャーズの言葉から始めよう。

修辞学は、誤解とその改善に関する研究であるべきである。われわれは生涯を通じて誤解と戦い続けるため、誤解を避け、誤解を取り除くことができる研究をする、そのことに弁解は必要ではない。もちろん、現在、われわれは、コミュニケーションにおいて絶えず失っているものの範囲や程度を測定する手段がないということは、われわれにとって避けられない状況ではある。(Richards 1936, 3)

このような状況のもとで、リチャーズは、まず、「修辞学」とはどのような学問であるべきか、修辞学のあり方について見直したと言えよう。リチャーズによれば、修辞学とは単なる言葉の修飾の研究を意味するのではなく、むしろ、修辞学は言語伝達において生じうる誤解を取り除き、それらの誤解を改善させることに努めるべきであるという。

リチャーズによれば、意味理解においては、文の構成要素である各語の意味理解よりも、言葉の機能について理解を深めることこそがより重要である。すなわち、個別的な「意味の効果」よりも、文全体の「意味の構造」(structure of meanings)に関する研究こそが意味理解において重要である。リチャーズは、次のように語る。

理解と誤解を説明し、言語の能率とその諸条件を研究するためには、〈単語だけがそれらの意味を持っていて、ちょうど壁が煉瓦の構成物として表象されるように、談話が意味するのは、それらの単語の意味の構成物として説明される〉というような見解は、しばらく放棄するべきである。われわれは分析の焦点を変えて、一層深く、詳細に把握することを試み、そして、議論の対象となる意味の最小の論じ得る単位の構造と、それが他の単位と一緒に置かれる時のこの変化の仕方とを考慮することを試みるべきである。(Richards 1936, 9-10)

リチャーズは、このように、〈ある文や語に至っては、絶対的に無条件的に、一定の意味があり、文の意味とは単なる語の意味の寄せ集め、あるいは構成物である〉という、リチャーズ以前の伝統的な意味論の見解について批判した。そして、彼は最小の意味単位の構造とはどういうものであるかを分析するとともに、それが、他の意味単位と結びつき、互いに影響し合っ  
てそれらの意味構造の変化が起こると主張した。つまり、彼は、意味とは、語や文に与えられた固定したものではなく、意味単位同士の相互作用によって変化し得る構造であると考えた。

要するに、伝統的な意味論では、文や語は一定不変の固定的意味を持ち、文の意味は語の意味の合成物に過ぎないとされ、そのような意味論のルールに従わない言語表現の全てを意味論的欠陥のある表現として排除する。さらに、このような伝統的な意味論の見解は、われわれの常識となり、〈文を構成する個々の語の意味を寄せ集めると文全体の意味が出来上がる〉とした。しかし、リチャーズによれば、そのような伝統的な意味論の常識的な見解が無条件に成り立つわけではないという。なぜならば、伝統的な意味論は少なくとも次のような二つの条件を前提とするからである。まず、①文や語は無条件に一定の意味を持つ。次に、②それらの文や語の意味に影響を与える諸条件があるにしても、それらは恒常的であるため、われわれはそれらの条件を無視してもよい。

リチャーズによれば、実際には、一定不変の固定的意味を持つ語はそれほど多くはないという。ほとんどの語は文脈が変わることにつれて、それらの意味も変わりうる。しかも、変わり方も、メタファーの場合のように、多種多様である。このように、リチャーズは伝統的な意味論の立場を覆す。彼は、〈全ての語、文には一定不変の意味がある〉という伝統的な意味論の考えを批判し、如何なる語も用いられた文脈によってその意味が変わりうる可能性が十分にあると指摘する。そして、リチャーズは下記のように言う。

それほど〈自分たちの仲間を気にかけること〉、これが意味というものの特質である。そして、それは、一部では、われわれがそれらを「意味」と呼ぶことによって表しているものである。意味はそれ自体では無に等しいものである。それは虚構 (figments) であり、抽象物 (abstractions) であり、もし、あなたが好むならば、われわれが発明した非現実的なものであると言っていい。しかし、われわれはある目的のためにそれら (意味) を発明したのである。談話のどの部分でも、時によって表現されたりされなかったりする談話の周りの他の部分と談話の諸条件が変わらない限り、結局、その本来の役目を果たすことができるようなその特有のあり方があるが、言葉の意味とは、われわれがそのような特有なあり方を考慮しないようにするものなのである。(Richards 1936, 10)

つまり、われわれが理解している〈語や文の意味〉とは、それ自体・固定したものとして存在するものではなく、われわれが自分自身の意思を伝達するために、われわれによって作られ

た抽象的なものである。しかしながら、そのような作られた意味は「特有なあり方」においてのみ、その本来の役目を果たすことができる。とはいえ、言葉の意味によってその「特有なあり方」が妨げられることがある。言葉の意味とは、語と語とのつながりができ、初めて成立するものなのである。すなわち、言葉の意味を成り立たせているそれぞれの語は独立した語として意味を持つのではなく、他の語との関係性においてそれらの語の意味が決定されるのである。つまり、この意味において、一つの文の全体的意味を構成するはずの、それぞれの語の意味は、独立した存在ではなく互いに依存し合う関係にあるということである。

このことを具体的に示すために、例を示そう。

例えば、「このリンゴは美味しい」という文の意味を考えてみよう。伝統的な意味論では、この文の意味は、「この」、「リンゴ」、「は」、「美味しい」という四つの語の固定的意義の結合であり、われわれは、これらの語の意味が分かれば、その文の意味が分かるということになる。この考えに従えば、「このリンゴは美味しい」という文の意味は、文字通りの意味のまま、つまり、ある特定のリンゴについて〈美味しい〉と語っているとなる。しかし、このような意味理解は曖昧であり、正確な意味理解に到達したとは言えない。

つまり、「このリンゴは美味しい」という発話には、発話者の〈意図〉が含まれており、その意図は、単に文字通りの意味からは判断できない。例えば、発話者にとって、リンゴは甘いから美味しいと言っているのか、それともちょっと酸っぱさがあるけれども美味しいと言っているのか、さらには、ある日常の一コマで、食欲がない人に家族が、このリンゴは美味しいから食べなさいと促しているのかも知れない。このように、如何なる発話でも、発話者の意図が含まれているため、発話者の意図する意味を理解することが重要である。そのような発話者の意図を含め、前後関係の文脈や事実的状况の違いから推察するしかない要素なども含まれている。

## 2. 談話の目標と文脈の型

リチャーズの意味論は二つの段階から成り立っている。

第一段階は、談話の目標の原理である。談話の「目標」(aims)とは、言語の機能に関する問題であり、われわれが話したり書いたりする目的が異なることによって、用いられた言語の機能(functions)も異なる。

この考えは、語一般をあたかも概念の名前であるかのように扱ってきた伝統的な意味論の立場を根本的に退けることとなった。それは、ある対象にはそれと対応する概念が存在するように、語にもその語に対応する固定した意味が存在する、という見解であった。それに対して、リチャーズは〈語の意味〉をあたかも〈概念の名前〉の如く扱うことが伝統的研究法の一欠陥であると指摘する。なぜならば、伝統的研究法によれば、語は人間の存在と関係なく一定不変

の固定した意味を持つからである。このように考えると、意味とは感覚所与（sense data）も同然のものとなる。

しかし、リチャーズによれば〈人間は他の事物に対して受動的に、いつも同じ反応をするのではなく、そのつど独特の反応をする〉。つまり、仮に意味が一種の感覚所与として与えられたとしても、全ての人間が同じ反応をするとは限らない。人間の反応にはそれぞれの特異性があり、ゆえに、反応の仕方も様々である。

リチャーズによれば、このような反応には基本的に二種類のものがあるという。一つは、感覚によるものであり、新しい種類の感覚に、過去において生じた、似たような事柄の効果が入り込んできて、われわれの反応を特徴づける。

例えば、過去に盲腸の手術を受けた人が、数年後に帝王切開の手術を受けたとする。その時に、この二つの経験が似ているとはいえ、新しい種類の刺激であるため、新しい種類の感覚所与として処理される。なぜならば、似ているとはいえ、新しい種類の苦痛を与えるかもしれないからである。だが、われわれは過去の盲腸の手術による苦痛も帝王切開の手術による苦痛も、同じ苦痛の一種として認識する。

われわれ人間の反応が、そのつど独自のものであるということの、もう一つの事例は、知覚による反応である。この時は、われわれは外界からの刺激を単に受け取るのみではなく、過去との関連においてそれをある種のものとして受け取るのである。このようにして、知覚は現在と過去の両方によって特徴づけられるところの反応として機能する。つまり、知覚による反応は感覚による反応と違って、能動的な働きをするのである。要するに、リチャーズに従えば、言葉の意味とはこのように、過去と現在の事柄との関係において作り出されたものである。

なぜならば、人間は単に外部の刺激を受動的に受け取るだけのものではなく、仮に、語や文に一定不変の固定した意味があるとしても、言葉の意味に対する人々の反応が一律に同じとは言えない。つまり、リチャーズが言いたいのは、「言葉の意味」とは、概念の名前のごとく単なる与えられた所与ではなく、人間の心の働きにより能動的に作り出された産物であるということである。

つまり、この問題は18世紀に行われたイギリス哲学界の一大論争として知られる、抽象概念をめぐる論争の問題と関わり、リチャーズはこの問題を解決するために新しい意味の定理を提案した。

その定理がいうには、われわれは一般的・抽象的ものから出発し、それを分裂させ、世界がわれわれをそうさせるように、分類し、そしてこれらの種類に重複した要素あるいは共通要素によって具体的で個別的なものに達する。(Richards 1936, 31)

つまり、18世紀の哲学的問題として、〈そもそも抽象的概念は存在するか〉という問があっ

た。もし、存在するならば、どのようにしてそれを知ることができるのか。また、具体的事実から、われわれはどのようにして抽象的概念に到達できるのか。つまり、これらの問題は、われわれがどのようにしてある対象を認識するのかに関わる。言い換えれば、われわれはどのようにして、対象と概念を結びつけるのか、という問題に行き着く。このような抽象概念にまつわる問題に関して、リチャーズは、まず、それを〈抽象的概念の形成〉の問題として究明しようとする。

例えば、われわれ人類には紙が必要である。そして、今、ここで、私は手紙を書いているとする。この時の紙はわれわれにとって具体的で個別的な事物である。さらに、それは、色は白で、サイズはB5で、罫線の入った紙であるというように。つまり、類別が狭く限定されればされるほど、具体的であればあるほど、それはますます特殊的となり、そこで用いられた言葉は文脈の中で初めて意味を持つこととなる。

そこでリチャーズは、言語の意味を次のように定義する。「意味」とは、その都度の状況や事態を表すために作られた「代表された効果」(delegated efficacy) のことであると。言い換えれば、言葉の力とは〈そこにないものの力〉を発揮させる代表物である。リチャーズによれば、そのような力は、文脈を通してのみ機能するとされた。

まず、単語の意味は、〈文字通り〉の「語的な文脈」(literary context) によって、つまり与えられた単語の前後にある他の単語との関係の中で決定されると考えられた。しかし、「文脈」という言葉には、リチャーズが指摘するように、場合によっては本の中でその語を除いた残りの部分全体を覆うほど拡張される場合がある。また、一般的な意味が拡張され、ある事が書かれたり言われたりする状況(circumstances)をも包括することがある。さらに、その時代に関することや、その単語の解釈に適切なことならなんでも包含することができる。これはある意味では、危険である。

ところが、リチャーズが「文脈」という用語に持たせた用法は、単なる〈語的文脈〉でも、「状況」という意味をもった広義の「文脈」でもなかった。この問題の考察に関しては、リチャーズは因果律で述べられるような、自然界で繰り返し起こる現象を使って説明している。

因果律とは、ある条件の下では、二つの事柄の内、その片方(原因となる出来事)が起これば他方(結果となる出来事)も起こり得る、ということを使う。リチャーズの説明によれば、人間が因果律に基づいて出来事を説明する場合、ある意味では「恣意的」に行われるという。それは因果律を用いる目的がいろいろ違うからである。すなわち、人間はその時々の実践的目的のために、恣意的に、ある意味では「主観的」に諸々の事柄の分類の仕方を決める。言い換えれば、ある出来事が起こった場合、その出来事に対して、その諸々の条件または相続く諸々の事柄の全体の中から、すなわち、そういった出来事の文脈の中から、その原因としてどのような出来事を選び出すかは恣意的である。

「文脈」の意味なるものは、最も一般的に言って、ともに一緒に繰り返し起こる出来事の塊の全体につけた名前である。つまり、〈原因かあるいは結果として、われわれが選び出す全てのものや、必要な〔因果的〕条件をも含めたもの〉につけた名前である。しかし、意味がそれに依存する因果的繰り返しの様式は、私が先に述べた「代表された効果」という点で特異的である。この文脈においては、一つの項目——典型的には語——は、再現しなくて済む部分の役割を引き受ける。(Richards 1936, 34)

つまり、文脈とは、〈意味の原理に便利な繰り返し起きる事柄の塊〉のことを言う。そして、文脈は文を単位として、一つの文の意味を決定する。例えば、「お腹が空いた」と私が言ったとしよう。この時に、私はこの文を通してどのような意味を伝えようとしているのか、考えてみよう。大抵の場合、この発話から、発話者は「ご飯を食べたい」、「食事がしたい」のだと理解される。しかし、伝統的な意味論に従えば、〈お腹が空いた〉という文の意味は、文字通りに〈お腹の中が空(から)になった〉と理解されるのかもしれない。しかし、大抵は、聞き手は「お腹が空いた」という発話を聞いて、発話者の意図した意味を容易に理解することができる。

それはなぜなのだろうか。上の例から分かるように、意味とは、単に、文の構成要素であるそれぞれの語の組み合わせではないことが分かる。リチャーズによれば、意味とは、むしろ、われわれが自分達の意志を伝達するために作り上げた非現実的・抽象的なものことである。且つ、意味は「因果的繰り返しの様式」に、つまり、リチャーズが言う「文脈」に依存しているという。例えば、先に述べた〈お腹が空いた〉という事象に沿って考えてみよう。この事象は「因果律で述べられる自然界の反復生起現象」の一つとして考えられる。われわれの常識では〈人は、お腹が空いたら、それが原因となって何か食べたいという欲求が生まれ、それを満たすように食べ物を食べる〉というように理解する。つまり、人間はこのように因果律の中でのごとくを理解しようとする傾向がある。

その結果、〈お腹が空いた〉と聞いて、すぐに〈お腹を満たす〉ことを思いつくのである。つまり、〈お腹が空く〉ことが原因で〈食事をする〉と理解する。このように、われわれは何か起きたら、その結果を推測するのである。そして、そのような事象を言語化することに当たっては、文脈、つまり「因果的繰り返しの様式」が大抵の場合、省略される。なぜならば、リチャーズによれば「記号また語には現存しない原因や条件を代表する力がある」からである。

以上のように、リチャーズは〈文脈〉を「因果的繰り返しの様式」と定義した。そして、このような定義に従って、〈言葉の意味〉を、「言葉が代表された効力を引き出す基盤となる文脈のうち現存しない部分」と規定する。さらに、リチャーズは文脈の原理を支えるのが「類別と認識、それから、反応法則や類似行動の反復生起である」と考えた。つまり、リチャーズは以上のような「文脈の原理」を用いて、修辞学の新しい原理を構築した。そのような「文脈の原

理」によって、「誤解防止」が説明されるのみならず、「一つの発話に意味を供給するさまざまな文脈の対立に関する」難問まで解決することができた。

例えば、従来、旧修辞学では曖昧性を言語表現の欠陥として取り扱い、曖昧な表現を用いないように努め、曖昧な表現を排除しようとした。しかし、「曖昧な表現を使うな」といっても、われわれは使う前から、その表現が、曖昧な表現であることをどのように知ることができようか。「曖昧な表現」とは、その表現の意味が状況や文脈で変わるものを言うが、そもそも言葉の意味というものは、「文脈の原理」に従えば、文脈に依存するものである限り、曖昧性は避けられない。むしろリチャーズは、曖昧性とは、「言葉の力」の結果であり、曖昧性を完全に無くすことはできない。しかしながら、「文脈の原理」を用いることで、最も広い範囲に、最も微妙な種類の曖昧性まで発見することができるという。例えば、‘reason’という言葉は、場合によって、「理由」を意味したり、場合によって「推論」を意味したりする。このように、同じ言葉でも、文脈が変わることによって、その意味も変わる。問題は、そのような多義性をなくすことではなく、文脈の把握によって、その文脈にふさわしい語の意味を確定することなのである。

### 3. 言葉の相互影響 (interanimation<sup>5)</sup>)

ここからは、リチャーズの意味論の第二段階が始まる。第一段階は、文の意味に関する考察であり、文の意味に関して、文を単位とする〈文脈〉でもって説明した。第二段階は、文を構成する語の意味に関する考察である。ここでは、文を単位とする文脈と違って、語を単位とする文字通りの「語的な文脈」(literary context)をもって語の働きについて説明することになる。そして、これら二種類の文脈を区別することが重要である。

意味論の第一段階は、〈文を単位〉とした広い意味での文脈の中で意味を確定するプロセスであり、語の結合体である文が、その文の構成要素であるそれぞれの語にどのような効果を及ぼすかを考察した。それに対して、意味論の第二段階は、〈語を単位〉とする狭義での文脈であり、それは語用論や言語外の状況という意味での「文脈」ではなく、文字通りの「語的な文脈」の機能が分析される。「語的な文脈」の機能の分析では、〈語の意味が、同じ文のその語の前後にある他の語に、いかに依存するか〉について考察される。

リチャーズは、まず、文の意味構造について考察し、次に、文の構成要素であるそれぞれの語の働きについて検討した。アリストテレスが言うように、文は言説の構成単位であるように、語は文の構成単位といえる。そして、意味構築を問題とする場合、それらの意味の最小単位である語の働きについて理解することが極めて重要である。言い換えると、〈文の中ではそれぞれの語はどのように意味が与えられ、互いにどのような関係にあるのか〉を解明することが重要である。文とは、ある一定の規則に従い、一連の語を一緒に並べて作り上げた結合体で



ある。ここでいう、「ある一定の規則」とは、文法のことを指している。すなわち、書くことに関連して、文字に書き記す時、どこで一つの語が終わり、どこで一つの語が始まるかを明確にすることが要求される。このように作り出された文章には様々な書き方が存在し、この書き方こそが、語に多くの独立性を与えると考えられた。

要するに、リチャーズによれば「語の相互依存（the mutual dependence of words）は、言説の型（the type of discourse）によって変わる」という。しかし、このことは、文における語の機能に関わる問題であり、全ての書記形態において語と語は相互依存的な関係にあることを意味するのだろうか。リチャーズによれば、語は、ある書記形態、つまりある書き方においては、他の語に依存する傾向があるのに対して、他の書き方では、独立していて、他の語の影響を受けない傾向がある。

では、どのような書き方において、語と語は互いに依存し合う関係になるのだろうか。「語の相互依存」とは、ある語を他の語と組み合わせることによって、もともとの意味が失われ、そして、新しい意味で用いられるようになることを言う。これは、言葉の用法に関する問題であり、例えば、文を語の結合体の目盛りと喩えるならば、目盛りの両端にどの種類の語を置くかによって、文全体の意味が左右される場合がある。つまり、それらの語の種類によって、われわれがそれらの語に与える意味が変わるという考えである。仮に、その語の結合体である目盛りの片方に、それ自体では、独立していて、他のどんな語と組み合わせられても、同じ意味を持つ語が置かれるとしよう。これとは対照的に、他方には、まるで詩歌のような、それ自体では、一定不変の意味を持たない、つまり、それと共に用いられる他の語に依存してこそ、意味を持てるような語が置かれた場合、〈意味の移動〉への傾向が生じる。

言説において、文の中でこのような一定不変の意味を持たない語があることで、文全体の意味さえ不安定になる場合がある。なぜならば、リチャーズによれば、それは一つの意味を表すことに留まらず、いくつかの意味の間の移動への傾向を意味する。この種の書き方をするジャンルとしては主に詩歌などが考えられる。

しかし、リチャーズによれば、意味の移動は詩歌のみではなく、最も厳密な散文においてさえ見られるという。散文の場合は、文が展開することにつれて変化が生じる。例えば、“The cat is on the mat”という文は、冠詞を除けば、‘cat’で始まって‘mat’で終わる。このように、非常に明晰な散文においてさえ、ある種の進展（progression）が見られる。この進展は、次に来る語があることを暗示しており、その語が、その文においてどのように機能し、且つ、どのような影響を与えるかを考慮するよう求められる。

このように、文と語の関係が複雑であると同時に、語と語の関係も複雑であることが分かる。そして、文の意味にしても、語の意味にしても、文脈に依存していることは明白である。リチャーズは次のように語る。

いかなる言葉も、孤立のままでは、その善悪、正否、美醜、その他、作家に重要ないかなることについても判断できない。(Richards 1936, 51)

リチャーズの〈文脈の原理〉は、このように、伝統的な意味論の立場を容赦なく覆した。伝統的な意味論に従えば、あらゆる言葉は、本来、一定不変の固定した意味を持っており、且つ、それらの言葉には、正しい、良い用法があると考えられていた。リチャーズは、このような伝統的な意味論の見解を「慣用法の教義」(the doctrine of usage)と言った。

慣用法の教義は、われわれに言葉の固定的意味の信念と慣用法の信念を教え込む傾向がある。従って、われわれは全ての言語表現をその常識でもって理解しようとする。その時、その常識から少しでも外れると違和感を抱き曖昧な表現、もしくは、欠陥のある表現であると判定される。なぜならば、その時の私たちは、すでに〈固定的意味の信念〉と〈慣用法の信念〉に支配されており、新しい意味をそのまま受け容れることはなく、慣用法の四大原則(正確、精密さ、妥当、表現性)をもって、新しく作られた意味を評価する。そして、慣用化されていない新しい意味には、時に、不正確さを感じたりする。つまり、伝統的な意味論の考え方に従えば、あらゆる言葉は決められた意味と用法で使われるべきなのである。そして、そのルールを破った言語表現は欠陥のある表現か、間違えた(正しくない)表現かのどちらかであると理解される。

ところが、リチャーズによれば、言葉は他の言葉との関係においてのみ、その言葉はどの性質の言葉であるかが分かる。要するに、言葉はもっとも優れた伝達手段として、その役割を果たせてこそ言葉としての価値がある。例えば、〈美しい〉という言葉について考えてみよう。〈美しい〉とはものごとの〈性質〉を表す言葉であるが、何に対して、何が美しいのかについて説明しなければならない。例えば、醜いものに対して美しいもの——〈美しい女性〉、〈美しい声〉、〈美しい瞳〉などのように、〈美しい〉という言葉は他の言葉との関係においてのみ機能する。要するに、意味理解においては、言葉の機能を理解することこそが重要である。

語や句は、それを制約する前後の語句から一時的に引き離されると、その語句は、見当はずれの意味を勝手に持つようになり、従って、それに従う他の言葉の半分までだますだろう。(Richards 1936, 55)

このように、リチャーズは〈慣用法の教義〉を二つの側面から批判した。まず、慣用法の教義では「言葉のよい用法とは、もっとも優れた作家の一般的な現代的慣用法である」と考えられた。それに対して、リチャーズは〈作家は言葉を上手く使いこなすからこそ作家であると決めつけるが、彼らの用法が正しい、よい慣用だと決まっているわけではない〉と批判する。逆に、「慣用法の教義は言葉の相互影響を排除し隠蔽する傾向がある」という。

ところがリチャーズによれば、語にしても句にしても文脈から離れては、明確な意味を持つことができない。文脈の中においてのみ、正確で、適切で、且つ妥当な意味を持つことができる。つまり、意味構築に関して、文の意味を支配する「反復生起する出来事群（因果的繰り返しの様式）」としての文脈がある一方、語の意味を支配する「語的な文脈」がある。

さらに、リチャーズは「文脈」をわれわれの知覚によく見られる現象の一つとして捉えた。例えば、テーブルの上にあるコップを知覚する時に、われわれはある知覚の原理に従っている。一般的に、コップを図として知覚し、テーブルを地として知覚する。そして、場合によって、図と地の関係が逆転する場合も考えられる。ゲシュタルト心理学におけるルビンの盃 (Rubin's goblet) の図がその一例である。その図は、場合によって、盃に見えたり、場合によって二人の人間の顔に見えたりする。つまり、この二通りの知覚は、同時に知覚されないが、互いに、依存し、影響する関係にある。一方を図として知覚すれば、他方は地として知覚される。その逆も成り立つ。

リチャーズが言いたいのは、われわれの知覚がこのように物体と物体の間の依存関係に基づくように、語と語は、互いに依存し、影響する関係にあるということなのである。彼は次のように考えた。語は、それが用いられる文と、それが宿る文脈に応じて、絶えずその意味が変わる、と。しかし、このような意味変化を、ある仮説では談話における長所ではなく、欠点であると考えた。そして、われわれはこのような考えに惑わされ、全ての言葉を個別科学の専門用語のように捉えた。しかし、全ての言葉を専門用語として捉えることは、リチャーズによれば「固有意義の迷信」に陥ってしまい、言葉が柔軟性と精緻さを持つために必要となる、〈意味の推移〉が不可能となる。

言い換えれば、重要なのは、言葉の意味推移こそが言葉の柔軟性と精緻さの表れであり、人間が達成する相互理解に重要な役割を果たしているということである。

#### 4. メタファー

リチャーズの著作『修辞学の原理』(*The Philosophy of Rhetoric*, 1936) の〈メタファー〉の章は、アリストテレスの「メタファーを使いこなすことは、何にも勝る重要なことである」<sup>6)</sup>という主張から始まる。これは、アリストテレスが『詩学』の中で、メタファーの四つの型を論じた後に行う発言であるが、アリストテレスは、メタファーを使いこなす能力は、学習によって得られるものではなく、その人が生まれながらに持つ能力であり、「よいメタファーは似ていることを見て取る」こと、つまり物事の間に〈類似性〉を洞察することであると述べている。

リチャーズによれば、アリストテレスのこの主張には、少なくとも三つの憶説が潜んでいるという。そして、これらの憶説はメタファー研究が、諸々の研究の中で占めるべき正当な位置

を占めることを妨げ、且つ理論と実践において、それに開かれた道を進むことを妨げて来た」と批判した。

その三つの憶説とは以下のようなものである。

- (1) まずは、「よいメタファーは似ていることを見て取る」という主張に含まれる憶説である。アリストテレスの『詩学』での主張から見れば、メタファーを駆使する能力は、その人に生来備わった能力である。つまり、類似を見抜く眼識は全ての人に備わる能力ではなく、そのような才能の持ち主に限る。アリストテレスのこの主張に対して、リチャーズは、人間であれば、程度の相違はあるものの、だれでも類似を見抜く眼識があり、それは人間が生き延びるために、不可欠な能力であるという。しかも、程度の相違は、学習することによって、ある程度まで治せるものであるとした。つまり、リチャーズにとって、類似を見抜く眼識とは、学習能力の一種であり、ある特定の人にだけある力ではなく、全ての人間にある力であるということになる。
- (2) 次に、「メタファーを使いこなす能力は他人から学び取ることができない」という主張に含まれる憶説である。リチャーズによれば、メタファーを使いこなす能力は、われわれ人間をはっきり動物と区別する他の一切の事を学ぶ方法と同様で、それは全てわれわれの習得する言語と共に、言語を通して他人からわれわれに伝わってくるものである。すなわち、人間は学習能力によって、そのような能力を獲得することができるという。しかも、そのような能力は言語を通して習得されるのである。
- (3) 三つ目の憶説は、〈メタファーは、言語の自由な活動の全てに遍在するのではなく、言語使用における特殊で、例外的なものであり、言語の正常な活動様式から逸脱している〉というものである<sup>7)</sup>。それに対して、リチャーズは、メタファーは言語使用における、特殊な現象ではなく、言語の自由な活動の全てに「遍在する原理」(the omnipresent principle) であると考えた。

要するに、リチャーズによれば、メタファー研究は一時的に死を迎えたが、それはアリストテレスの上記のような主張に欠陥があったからであるという。しかし、アリストテレスでは、メタファーは、『弁論術』と『詩学』の両方で論じられているが、リチャーズが引用した部分は、『詩学』にのみ見出せる表現である。しかも、アリストテレスのこれらの主張は詩作に関する論述であり、詩作にはどのような要件が必要であるかについて論じている箇所では主張されているものである。従って、アリストテレスが前提としているとリチャーズが見なす、これらの憶説自体が、実はアリストテレスのテキストに正確に基づいているのではないのである。アリストテレスが前提としているという、これらの「憶説」は、リチャーズの憶測に過ぎないと言える。

しかしながら、メタファーを特殊な言語現象ではなく、〈言語の自由な活動の全てに遍在する原理〉としたことは、リチャーズのすばらしい発見であった。彼は、まず、メタファーがわれわれの言語活動のあらゆるところに深く浸透していることを指摘したが、そのみならず、科学が用いる厳密な言語においてさえも、メタファーを排除したり防止したりすることは難しいと指摘した。また、メタファーは、美学、政治学、社会学、倫理学、心理学、言語理論などの学問においても頻繁に用いられていると指摘している。さらに、伝統的な修辞学におけるメタファーの研究はあまりにも消極的で、浅薄であるため、問題解決を成し遂げるどころか、問題の根源たるものさえ察知できてないと指摘した。

そもそも、メタファーの使用は、われわれの日常生活の談話から、美学、政治学や、哲学のような抽象的な学問に至るまで広く見られる。例えば、哲学が厳密であり、抽象的であればあるほど、それは一層メタファーの助けを必要とする。しかし、一部の哲学者は、メタファーの使用を禁止すべきだと主張するのみでなく、メタファーの助けさえも借りてないと公言する。実際は、哲学的思索が、抽象的になればなるほど、われわれは絶えずメタファーを手段として思索せざるを得ないのである。仮に、メタファーの使用を禁じ、避けようとしても、まず、どのような表現がメタファーであるのかを知らなければならない。言語活動全般にメタファーは遍在するのであれば、抽象的に思索し、それを言語表現へと転換する学問に於いては、メタファーを排除したり防止したりすることは、そう簡単なことではないだろう。

意味に関する文脈の原理によれば、「意味」とは記号の背後に隠された、謂わば「力」であって、記号はこのような力によってさまざまな文脈のなかで、実際には現存しない部分である抽象物などを結合して新しい統一体を作るのである。つまり、言葉とは、過去のばらばらな印象に対するものではなく、一般的な状態に対する代用物である。そして、リチャーズは、このような意味に関する「文脈の原理」によって、メタファーの原理を考えた。

最も単純に公式化すれば、われわれがメタファーを用いる時、異なる事柄に関する二つの思考が一緒に活動し、そして、それは各々の単一の語あるいは句によって支えられる。そして、その語や句の意味はそれら思考の相互作用（interaction）の結果である。（Richards 1936, 93）

例えば、「アキレウスはライオンである」と言った場合、われわれが、ライオンという動物でもってアキレウスという人間を記述していることが分かる。つまり、メタファーの場合、このように「アキレウス」という人間と「ライオン」という動物に関する二つの思考が同時に与えられる。この時、これら両者に関する思考は、「アキレウスはライオンである」という文や句、あるいは、各々の語または記号によって支えられている。そして、語（アキレウス、ライオン）の意味、また、文（アキレウスはライオンである）の意味は、アキレウスに関する思考

(状態や事態といったもの)とライオンに関する思考(状態や事態といったもの)が互いに影響し合うことによって、新しい意味が構築される。なぜならば、リチャーズの意味論の原理、つまり文脈の原理に基づけば、如何なる語や句も、文脈の影響を受ける。そして、文脈の中でこそ、それらの語または記号(アキレウスとライオン)は単なる概念に与えた名前のようではなく、記号の背後に隠れた力(意味)を獲得することができる。それは、文脈のうちに現存しない部分を結合して新しく作った統一体である。新しく作られた統一体は、次のように定式化することができる。異なる事柄に関する二つの思考がともに与えられる。そして、両者は、言語表現に支えられる、新しい統一体の誕生(二つの思考が互いに影響し合い、結合される)を促す。

メタファーとは、〈ある語の様々な文脈における現存しない部分または状態の相互作用〉によるものである。つまり、リチャーズのメタファーの概念から見れば、メタファーとは言語使用における特殊な現象ではないことが分かる。

伝統的な理論は、メタファーの諸様式の中の、ほんのわずかに注目し、そして、メタファーという用語の適用を、それらのほんのわずかのものに限定した。従って、メタファーは、あたかも言葉の問題、つまり言葉の交替、あるいは、言葉の置き換えであると思われるようにした。しかるに、基本的には、メタファーは《思考》相互間の借用、交換であり、文脈間のやりとりである。《思考》はメタファー的であって、比較によって進展する。そして、言語のメタファーもそこに由来する。メタファー論を改良しようとするならば、この事実を忘れてはいけない。(Richards 1936, 94)

リチャーズは、このように、伝統的な修辞学で定義して来たメタファーを容赦なく退けた。そして、われわれの思考はメタファー的であるからこそ、言語上のメタファーが存在すると指摘した。

メタファーには、確かに、言語上の欠陥を埋める、あるいは、言葉の装飾(ここでいう言葉の修飾とは、特に直喩のことを言う)としての役割があるものの、単なる言葉の文彩の問題と簡単に断言することはできない。言語はあくまでも、人間の精神活動を表現する道具であり、それ自体では何の意味も持たない。言語は、その本来の機能を果たしてこそ、伝達道具としての意義があると言える。つまり、言語はわれわれの精神活動を表す道具であり、われわれの精神活動は言語という記号を通して表現される。その時、われわれには記号に隠された力(意味)を十分に発揮することが期待される。

言語伝達とは、簡単に定式化すると、次のようになる。〈思考(話し手)―言語表現―思考(聞き手)〉ということになる。つまり、言語伝達とは、われわれが自分の伝えたいことを、言語表現を通じて(言語を媒体として)、相手(聞き手)に伝えることをいう。メタファーもこ

のような言語伝達の種類である。つまり、リチャーズによれば、言語の機能に関する探究とは、単なる形式的な記号の意味に関する探究ではなく、「思考や感情などその他のあらゆる様式 of 精神活動がいかに行われるか、さらに、いかにして生きるべきか——つまり、人間の生に関わる問題への探究でもある」。要するに、リチャーズによれば、メタファーは単なる言語表現の問題ではなく、メタファーの本質は人間の生に関わる。なぜならば、リチャーズによれば「メタファーの駆使は人間の生を支配するからである」。

このように、リチャーズは、文脈を中心とした意味論の原理をメタファー論に適用し、さらに、人間の生に関わる問題として捉え直し、メタファーという言葉 を非常に広い意味で定義した。メタファー研究は、こうして彼以降、再び盛んになった。彼のメタファー論の影響を受けたものとしては、例えば、ブラックの相互作用説やサールの語用論説などが挙げられる。さらに、リチャーズの文脈の原理は意味論の歴史において新しい展開をもたらした。

ところで、リチャーズはさまざまな刺激的な見解を提案したものの、その見解を体系化しなかったため、メタファー研究の歴史において彼のメタファー論は取り上げられることが少なかった。メタファーの研究者は、リチャーズのメタファー論に込められたさまざまな偉大な発見を認識する必要がある。また、彼のメタファー論では、〈われわれの思考はメタファー的であるからこそ言語上のメタファーが存在する〉ゆえに、〈メタファーの駆使は人間の生を支配する〉と考えられた。この点において、アリストテレスのメタファーの定義とは、矛盾しないと考えられる。

さて、リチャーズは、言語学的視点から、メタファーにどのような定義を与えたのか、見てみよう。リチャーズによれば、メタファーは語と語の間の置き換えというより、むしろ、思考と思考の間の借用である。伝統的修辞学では、メタファーとは〈喩えられるもの〉と〈喩えるもの〉という二つの要素を持ち、それらの間の関係が不明確な形で現れる言語表現として定義される。それに対し、リチャーズでは、メタファーに与えられた二つの思考を、それぞれ、「主意」(tenor)と「媒体」(vehicle)と名付け、明確に区別した。そして、このように、メタファーの二つの部分を区別し、明確な術語で表すことこそが、混乱に陥ることなく、明晰な分析を行うことに必要不可欠な条件であるという。

ここで、不明確な術語を使って議論すると混乱することを示すものとして、リチャーズが用いた例の一つを挙げることにしよう (Richards 1936, 97)。もし万一、われわれがよく使う「ジュニー」(12、英語だと twelve)という言葉、ある時は1 (one)、ある時は2 (two)、ないし、ある時は21 (twenty-one)の代わりに用いたりするにしよう。そうすると、一番簡単な「算術」でさえどのようなものになるか分からなくなるだろう。メタファーの分析に関しても事情は同じである。明確な術語で分析することが不可欠である。

同様に、リチャーズによれば、意味 (meaning)、表現 (expression)、メタファー (metaphor)、比較 (comparison)、主題 (subject)、文彩 (figure)、心像 (image) などのような言葉の全て

に、意味の転移が起こる可能性は十分にある。(Richards 1936, 97)

さて、リチャーズは「主意」と「媒体」という概念を明確に規定した上で、両者の「相互作用」という動きを指摘して、次のように言う。

メタファーの最も重要な用法の多くにおいては、媒体と主意とが共存して初めて意味が生じるのであり、意味（主意から明確に区別された）はそれら両者の相互作用（interaction）なくしては得られないものである。(Richards 1936, 100)

つまり、リチャーズが言う「媒体」とは伝統的なメタファー論では、〈喩えるもの〉であり、「主意」、つまり〈喩えられるもの〉の単なる文飾として扱われてきた。要するに、媒体は主意にいかなる影響も与えないと解釈されて来た。しかし、リチャーズによれば、主意と媒体とは、協働によって両者のいずれにも帰属しえない様々な種類の力を備えた意味を獲得するという。そうすれば、媒体は単なる主意の修飾ではなくなり、主意は媒体を導入するだけのものではなくなる。

リチャーズがその説を批判的に継承し、その意味で大いに影響を受けたケイムズ（Henry Home Kames, 1696-1782）のメタファー論は、主意を〈主題〉（the principal subject）と名づけ、媒体のことを〈主題に似通って想像されたもの〉と名づけ、〈媒体は文字通りに適用できるような言葉のみを使用しなければならい〉というルールがあるとする。つまり、メタファーにメタファーを重ねるような用法を禁止するのである（Richards 1936, 101）。しかしながら、ケイムズはメタファーを説明する際、リチャーズが「媒体」というところに、「二次的なメタファー」（メタファーにメタファーを重ねる用法）を使うことが、「主題」を〈強い光〉で照らすのではなく、雲の中に隠すようなものと述べている。リチャーズによれば、ここで使われている「強い」という表現は、メタファー的に使われた表現であり、「光」にまつわる事象が媒体となっている。つまりケイムズ自身が、二次的なメタファーを使っていることは明白である。だが、ケイムズの表現、つまり「〈強い光〉で照らすのではなく、雲の中に隠すようなもの」といった表現は、メタファーだとは意識されずに使用されているが、そのような表現は、従来は、「死んだメタファー」（dead metaphor）として扱われて来た。「死んだメタファー」とは、メタファー的な意味が慣習化され、文字通りの意味として解釈されてしまっている表現である。

リチャーズによれば、「媒体」に、二次的メタファーたる語を使用しても何の困難も生じないという。これは大変重要で、且つ本質的な指摘である。リチャーズは、一つの語には文字通りの意味とメタファー的な意味が両方存在すると考えたからであり、それは、次のことを表している。つまり、リチャーズは、それまで、区別されて来た〈死んだメタファー〉と〈生きた



メタファー〉との分類を否定しているのであり、それらの両方をまとめて、「メタファー」と言っているのである。それは、レイコフらの現代の認知言語学者が言うところの「概念メタファー」<sup>8)</sup>の考え方の先駆的見解と言ってよいだろう。

ケイズは、メタファーが類似を根拠とすると主張したものの、メタファーには類似性のみではなく〈主意と媒体の間の他の関係〉に基づく場合もあることを認める。その、類似以外の他の関係として、ケイズが挙げるのは「隣接連想の原理」である。それに対して、リチャーズはむしろメタファーとして使用される主意と媒体との間には、両者の相違点 (disparities) がことさらに意識される場合があることを強調した。

上記の例、つまり〈主意と媒体との相違点が強調される事例〉としてリチャーズは、ケイズ提示した「眩暈のする崖縁」(giddy brink) という例を取り上げる。例えば、「微笑ましい花びら」がそれと類似の例である。これらの例では、用いられた形容詞は修飾している名詞の如何なる性質をも表すことができない。このようなメタファーの用法は、アリストテレスのメタファーでは、類似関係に基づく「機能否定式修飾方法」<sup>9)</sup>に当てはまる。

ところが、リチャーズは、知覚された崖縁そのものが〈眩暈〉という性質を持つという。それは、以下のような意味においてである。つまり、「眩暈のする」(giddy) ということは、単に「眩暈させる」(giddy-making) のではなく、実際に崖縁がグルグル回り、旋廻するようと思われるというのである。その時、われわれの目の眼球は、自らの運動を崖縁を含む外界へと移していることになる。このようにして、知覚された崖縁そのものが、実際に〈眩暈〉という性質を持つことができるようになる。つまり、リチャーズによれば、メタファーとは、外界に関する知覚パターンのことである。そして、それはまずはわれわれが世界に対して、「投射した」、「与えた」、ないしは「かぶせた」認知的パターンである。したがって、比喩的言語表現といえども、われわれが知覚した世界そのものがそのような属性を有しているかのように知覚し、認識するのである。

われわれの世界は投射された世界である。そこには、われわれ自身の生活から、外界に課した諸特性が入り混じっている。〈われわれは、自ら与えたもののみを受け取るのである〉。言語におけるメタファーの諸過程、すなわち、明確な言語メタファーにおいてわれわれが研究する語義間の交換は、知覚された世界の上にかぶせられた (super-imposed) ものであるが、この知覚された世界なるものが、実は以前の、もしくは、知らない [意識しない] メタファーの所産なのである。このことを忘れたら、メタファーを正当に論じることはできない。(Richards 1936, 108-109)

ここで言う投射された世界とは現実世界のことであり、いわば、現実世界はわれわれの精神世界から投射されるものである。言語上のメタファーはわれわれが知覚した事態をそのまま、

生き生きとした形で表している。つまり、メタファーとは、〈われわれの精神活動と現実世界を結びつける知覚パターン〉のことである。例えば、〈空腹〉を感じた時にわれわれは「ご飯（飯、ラーメンなど）を食べる」と言うが、この「ご飯」も具体的には、様々な食べ物を指し示しており、それは種で類を表す言葉の転用で、広義のメタファー的表現である。メタファーはそのようなやりとり、つまり精神活動と現実世界のやりとりをそのまま表現していることに過ぎない。そこにはいかなる言葉の加工なるものも見られない。結局、リチャーズは、メタファーという用語をこのように、非常に広い意味で捉えたということである。メタファーとは言語特有の問題というより、われわれの精神世界と現実世界を結びつける媒体、言い換えると知覚パターンのことであると言うことができよう。

私は、ある言葉が、ジョンソンの言葉を引用すれば、「一つの語で二つの意味を与える」場合、その語の様々な用法を一つに合成して、あることが、あたかも他のことであるかのように話す場合の全てを含めるように、メタファーという言葉を使った。さらに進んで、あることを、他のことを表す言葉で、知覚し、考え、感じるある過程——建物を眺めながら、それが顔を持っており、特殊の表情でもってわれわれに向かってるように思われる時など——をも、メタファー的なものの中に含めた。私は以下のように主張したい。この種のことは、知覚の全体ではごく普通のことで、知覚の成長（子供のアニミズム世界など）を研究すれば、そうにちがいないことが分かる。(Richards 1936, 116-117)

例えば、「机の脚」という例は、メタファー研究では、よく「死んだ (dead) メタファー」(慣用表現)として用いられる。脚と言えば、動物のような生き物に共通に言える身体の一部であり、身体を支える以外に、歩く、走るなど、動く時に、身体を運ぶ役割をも果たす。しかし、脚は、生き物以外のもの、例えば、机や椅子などの人工物に対しても用いられていることが周知の通りである。ところが、机や椅子の脚は、歩くことができない、単なる支えるという役割を果たしているだけである。確かに、四つ脚の動物や机の脚には共通する部分がある。しかしながら、机の脚は動物の脚の全ての機能を持っているわけではない。つまり、「机の脚」という記述は、「動物の脚」と知覚上共通しているが、あくまでも「動物の脚」とは異なることも明白である。リチャーズに従えば、われわれはこのように異なるもの同士の間の「共通の特徴」(common characteristics)としての知覚パターンをメタファーの根拠としていると言える。

また、〈ある人〉を「鴨」、「豚」、「家鴨」などの動物の名称で呼んだ場合はどうだろう。リチャーズによれば、この場合、その人がこれらの動物に実際にどこか似ている点を探す必要はない。辞書では、豚の定義として、「太った人、食いしん坊などをのしって言う語」と書いてある。鴨の定義には、「利用しやすい相手」と書いてある。また、家鴨を「魅力のある、ま

たは愉快なもの」と書いてある。つまり、豚といえば「太っている、たくさん食べる」などのイメージがあるに対して、家鴨といえば「やさしい、愉快的」といったイメージがある。

リチャーズによれば、メタファーは大きく二つに分けられるという。主意と媒体との間に存在する直接的類似（direct resemblance）によって働くものと、両者に対して（しばしば、非本質的で、無関係な理由を通して）われわれがとる、ある共通の態度（common attitude）によって働くものとの二種類がある。ここでいう二種類は、おそらく、前者は、類似性を根拠としたメタファーであり、後者は非類似性、つまり、相違（不同）を根拠としたメタファーである。言い換えれば、メタファーは、二つのものが分け持つ共通の特徴を表すと同時に、また両者が全く異なるもの（類別）であるということを示唆する場合もあり、メタファーは必ずしも共通の特徴を根拠として成り立つわけではないのである。

さて、「脚」という言葉について、一層、理解を深める必要があるように思われる。修辞学及び言語学では、ある言葉の用法に関して、「文字通り」（literal）であるか、「メタファー的」（metaphoric）であるか区別されることが普通である。しかし、そもそも一つの言葉の用法に関して、その言葉は文字通りであるのか、それともメタファー的であるのか、明確に述べることはできるだろうか。また、この二つの用法の境界が固定した一定不変のものと言い切ることができるだろうか。リチャーズは次のように指摘している。

言葉は、同時に文字通りでもあり、メタファー的でもある。ちょうど、言葉は、同時に、多くの異なるメタファーを支え、多くの異なる意味を一つの意味に集中することができるのと同様である。この点はいくらか重要である。その理由は、〈ある語がある働きをすれば、同時に他の働きをしたり、他の意味を持つことができない〉と想定することから、非常に多くの誤解が生じるからである。（Richards 1936, 118-119）

そもそも、伝統的な修辞学では、メタファーに関して媒体（喩えるもの）の部分は非文字通り、つまりメタファー的に用いられるというように考えられていた。しかし、リチャーズによれば、ある言葉は単にそこに置かれただけでは、それが文字通りに使われたか、それともメタファー的に使われたかの区別は完全に固定してもいなければ、一定不変でもない。しかも、それが文字通りの意味で使われているのか、それとも、メタファー的に使われているのかを簡単に決めることはできない。例えば、「脚」という言葉に関しては、人間は本物の脚のみではなく wooden leg も持っている可能性がある。この場合、wooden leg はメタファー的な用法なのか、それとも文字通りの用法なのか。リチャーズは、「人間に対して用いられた脚はその両方である。つまり、あるいくつかの点では文字通りであり、他のいくつかの点ではメタファー的である」という。もし、「義足」という意味で wooden leg という言葉を使用するとしよう。wooden の方は、硬くて棒のようになったという意味でのメタファーでなければ、文字通りの

使用であろう。つまり〈木でできている〉という意味になっている。他方、legの方は実際の脚の人工的代用品なのであるから、本物の足ではない。つまり、wooden legとは、文字通りの「木製の」という意味と、〈本当の脚ではなく、人工の「義足」〉という意味とが合成されているのである。その限りでは、メタファーなのかも簡単に決めることはできない。つまり、われわれが用いる日常の言葉の中にはこのような言葉が数多く存在する。とはいえ、それらの言葉について完全に区別が付かないまま、混同するような状況でもない。

リチャーズによれば、ある言葉の用法が文字通りのものであるか、メタファー的であるかを決める基準がある。その基準とは、彼が唱えた「文脈」の原理である。

われわれは、暫定的に以下のように決着することができるだろう。つまり、与えられた例において、その語がわれわれに二つのアイデアを与えるか、あるいは一つのアイデアを与えるか、私が提案した用語で言えば、共同して包括的な意味を作る主意と媒体の両方をその語が表すかどうかを決めるのである。もし、主意と媒体を区別できなかった場合に、暫定的に文字通りに捉え、もし、少なくとも二つの協同的用法 (co-operating uses) を区別できれば、今度はメタファーと捉える。(Richards 1936, 119)

リチャーズは次のような例を提示している。(Richards 1936, 119)

例えば、ハムレットが言う。

天と地の間に這い回る私のような人は何をしたらよいだろう。

What should such fellows as I do crawling between earth and heaven? (W. Shakespeare, *Hamlet*, Act 3, Scene 1)

つまり、この事例における、‘crawl’はメタファー的である。しかしながら、人間は文字通りに這うことができる。とはいえ、それは、赤ん坊か、あるいは、ある特殊な状況のもとでの大人である。そのため、上の文では人間ではなく、むしろ、他の這うもの、つまり虫や害獣などについて言及されていることは明確である。

リチャーズに従えば、そのような動物に関する言及が媒体となり、発言者であるハムレットに関する言及が主意となる。そして、リチャーズによれば、そのような主意と媒体の様々な関係は、類似性に基づいて比較されたものでもなければ、並置されたものでもないという。それゆえに、主意と媒体の相互作用は、両者の類似ということにのみ限ってはならないことを強調する。なぜならば、リチャーズによれば「媒体のもたらす主意への独特の変容 (the peculiar modification of the tenor) は、類似の働きよりも非類似の働きによる方が大きい」からである。

例えば、ハムレットが這うという場合、その迫力はそれと蛇などとのあらゆる類似から来るのみならず、それらの類似が持つ影響に抵抗し制限するところの差異からも、少なくとも同程度に来る。つまり、人間は、ある特別な状況（例えば、赤ん坊の状況では普通である）を除いては、そんなに這うはずがないということである。

## 5. まとめ

以上の考察から分かるように、リチャーズは〈文脈〉に支えられた意味論の原理を唱え、新たな修辞学の原理を構築した。さらに、そのような意味論の原理をメタファーの分析に導入し、言語学的視点からメタファー論を再構築した。その結果、メタファー研究は言語学を通してわれわれに伝わった。それによれば、意味とは、与えられた所与のごとく、一定不変の固定したものではなく、われわれによって作り上げられた、抽象的・非現実的なものである。したがって、それは如何なる語の場合も、文脈によって意味が変わりうる、ということである。

さらに、言語上のメタファーは、〈われわれの思考がメタファー的である〉ことに基づくと考えた。つまり、メタファーとは言語特有のものではなく、思考の問題でもある。さらに、メタファーの二つの部分をそれぞれ区別し、それぞれ「主意」と「媒体」という術語で記述した。このことがメタファー研究の歴史において重要な飛躍となった。というのは、それは、メタファーには、必ず二つの思考が共に与えられるため、どちらが話題となっているかを知ることが求められるからである。リチャーズがいう、「主意」とは、話題となっているもの——例えば、「アキレウスはライオンである」では、アキレウスという人間や、彼の行為を指す。「媒体」とは「アキレウスはライオンである」という言語表現自体である。メタファー的意味の場合、これら主意と媒体は互いに影響し合い、最終的にどちらにも帰属しえないような、新しい意味構造を作る。従って、「媒体」とは「主意」の単なる修飾ではないのであり、また「主意」は「媒体」を導入するための単なるきっかけではないのである。

結局は、メタファーとは言語表現に〈偏在する〉特殊な現象ではなく、他の全ての言語表現と同様に言語表現全体に〈遍在する〉一般的な原理であるということが出来る。われわれ人間は、言葉を発し、言葉を使う唯一の動物である。しかし、われわれの使用する言語体系は、しっかりとした音声体系や表記体系を備えた具体的な道具であるが、何らかの抽象性を有するといえる。その限りでは、われわれの言語による、意味伝達あるいは意味理解の過程には、絶えず誤解の恐れが生じうる。そのような誤解の可能性とは、メタファー表現だけに特殊な欠陥ではなく、すべての言語表現に誤解はあり得るのである。つまり、メタファーだから曖昧で、誤解の恐れがあるとはいえない。

なぜ、言語メタファーが存在するかと問われれば、われわれは次のように答えねばならない。すなわち、われわれが知覚し、考え、感じるといった、われわれの認知過程そのものが、

すでに抽象的で、非現実的なものが関与する過程であり、その意味でメタファー的であるからである。

## 注

- 1) リチャーズ (I. A. Richards, 1893–1979) の *The Philosophy of Rhetoric*, Oxford University Press, 1936. リチャーズのこの *The Philosophy of Rhetoric* (1936) からの引用は、全て筆者による訳である。
- 2) ジョン・ロックによるメタファー表現に関する否定的見解に関しては、『人間悟性論』(*An Essay concerning Human Understanding*) Bk. 3, chap. 10を参照のこと。これに関しては、文芸理論の大家 Paul de Man が著書 *Aesthetic Ideology* の第二章 The Epistemology of Metaphor にて本論との同じ趣旨で批判している。Cf. Paul de Man, *Aesthetic Ideology*, University of Minnesota Press, 1996, pp. 34–50.
- 3) Cf. Eva Feder Kittay, *Metaphor: Its Cognitive Force and Linguistic Structure*, Clarendon Press. Oxford, 1987, p. 6.
- 4) レイモンド・W・ギブズ Jr. 『比喩と認知：心とことばの認知科学』辻幸夫他訳、研究社、2008年、226頁 (Raymond W. Gibbs, Jr., *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*, Cambridge University Press, 1994) を参照のこと。
- 5) ‘interinanimation’ とは、‘inanimate’、つまり「生気をなくす」、「活気をなくす」という意味であり、ここではリチャーズのいう「語的」(literal) な意味の有効性を減少させるという意味である。一見、ネガティブな表現であるが、実は逆に新しい意味を創出するというポジティブな働きを指し示している。それが、メタファーに関する二つの語が互いに「語的意味」の効力を減少させて、新しい「メタファー的意味」を発生させるということを‘interinanimation’は意味している。あるいは、inanimationには、「生命、ないしは生気の欠如」という意味と、「生命や生気、魂の注入」という意味があり、後者の意味での用法が「新しいメタファー的意味」の〈注入〉となったとも考えられる。
- 6) Richards 1936, 89. アリストテレスの引用に関しては、以下の論文で、アリストテレスの理論を詳しく論じたため、ここでは立ち入らない。拙論、「思考過程における認知プロセスとしてのメタファー：アリストテレスのメタファー理論の認知言語学的考察」、中部哲学会編『中部哲学会年報』第48号、2018年4月、41–59頁を参照のこと。
- 7) Richards 1936, 90. 英文は以下ようになる。“Metaphor is something special and exceptional in the use of language, a deviation from its normal mode of working, instead of the omnipresent principle of all its free action.”
- 8) 「概念メタファー」に関しては、もともとは Joseph Grady の博士論文の中で提唱された primary metaphor という考え方がある。Cf. Joseph Grady, *Foundation of meaning: Primary metaphors and primary scenes*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley, 1997. さらに、Lakoff, George and Mark Johnson, *Philosophy in the Flesh: the Embodied Mind & its Challenge to Western Thought*, Basic Books, 1999を参照のこと。また、Grady の Metaphor に関する次の解説を参照のこと。Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (ed.), *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, Oxford University Press, 2007, pp. 188–213.
- 9) 「機能否定式修飾方法」に関しては、前掲の拙論、「思考過程における認知プロセスとしてのメタファー：アリストテレスのメタファー理論の認知言語学的考察」(2018)を参照のこと。

キーワード：メタファー、リチャーズ、文脈、主意、媒介

**Abstract**

## Resurrection of Philosophical Theory of Metaphor by Richards

Xiangchun

Our aim is to clarify the significance and importance of Richards' theory of metaphor in his *The Philosophy of Rhetoric* (1936) for the history of metaphor-study. We can estimate him as a pioneer of the idea of "conceptual metaphor" in the sense of Cognitive Linguistics. I. A. Richards advocated a new philosophy of metaphor which consists of the principle of 'context' and the terminology of 'tenor' and 'media'. According to him the problems of metaphor concern not only the linguistic expressions but also our way of thinking. His terminology of 'tenor' and 'media' made a great leap in the history of metaphor-investigation because he pointed out the duality of metaphor phenomena by means of his terms. He thought that such a duality can be found not only in the linguistic expressions but also in the thoughts of our consciousness. He asserted that the metaphorical duality is a general principle which we can find in all the linguistic expressions and further in our abstract thinking even in the nonlinguistic level. Therefore we can conclude that the reason why there are metaphorical expressions is that our cognitive processes as perceiving, thinking and sensing are of metaphorical character, namely more or less 'analogical' and 'abstractive'.

Keywords: metaphor, Richards, context, tenor, vehicle